

大あくびをする猫である。限度を越えて大きなあくびをすると、くるっとめくれるように裏返ってしまうのである。猫好きの作者なのだろう。

アクリル板ゆるゆる揺るる向ひ側苦しさの枕言葉何  
だらう 藤田紀美子

仕事場だろうか。アクリル板が置かれている店なのかもしれない。ながく続くコロナ禍の、漠然とした苦しさを表現した歌と読む。現状をなんとか相対化する方法を模索しているというか、急いでも仕方がない、そんな苦衷が読みとれる一首。

秋の畦稲穂の海の堤防となりて美りの波受けとめる

伊東美穂

「穂波」という語があるが、ここは穂波の「波」を文字通り海の波のイメージで押し通して一首に仕上げた気合いが、読者にも伝わってくる。大昔、太平洋戦争の最末期に、両親に連れられて千葉県我孫子市の布佐に疎開していたことがあった。今は東京のベッドタウンになっているが、当時は一面田圃の農村地帯だった。秋には見渡すかぎりの実り田で、風が吹くと稲穂の波が区切りである畔を決壊させるのではないかと思うほどの荒々しさで輝いていたのを今でも思い浮かべることができる。

猫耳の見え隠れする女子のいて耳は残りが顔は忘れぬ 関口千亜紀

リモートの授業をしている教員の歌の中の一。女子学生の画面に、猫の耳が見え隠れしているのだろう、と理解した。コスプレ用の猫の耳ならこれでいいが、私が

理解したように本物の猫ならば、「猫の耳の」と「の」を入れる方がよいだろう。

ドラゴンズファン七十年解説も戦略知識も一流となる 稲垣国男

プロ野球「中日ドラゴンズ」の生え抜きファンであることを自慢する一連。手放して自慢しているその手放し具合が持ち味。

夏の夜に発光しつづ装置は待ちをり指の詩歌紡ぐを 菊池鏡子

パソコンに向かって、詩あるいは歌を作ろうとしている場面。「デバイス」「ヴァース」といった英語の発音を五七七七七のなかに活かしながら、ちよつとおしゃれな一首にしあげた。これから出来る歌は、まさかやばな一首ではなさそうと思えるところが可笑しい。

人形の足先パーツ 白鳥が眠れるやうに並びてをりぬ 野原亜莉子

人形作りのための「足先パーツ」らしい。脚だけのパーツがいくつ並んでいるのだろうか？ 二箇所？ 二十箇所？ 机上に二十羽の白鳥が眠っているような情景を思いうかべると、なんだか凄しい。

たまきわる命を可算名詞とし倒れた瓶のように数える 駒田晶子

「可算名詞」という、日本語では聞き慣れない語をあえて使った一首。毎日、新型ウイルスによる死者の数が新聞やテレビに出るのが当たり前と思う心へ、「？」をつきつける。